

2021年度 こどもの木かけ・野のはな空のとり保育園 自己評価・学校関係者評価

保育所における自己評価ガイドラインより：「保育所が、保育士等の自己評価を踏まえ、全職員の共通理解のもと、組織としてより良い保育に向けた改善や充実に取り組むために行なう」

1. 基本理念・保育方針

■こどもの木かけ 2002 基本理念

『汝らは、地の塩、世の光である』
(マタイによる福音書5章第13節—14節)

キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。こどもの木かけ(玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園)では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。

■野のはな空のとり保育園 保育方針・保育目標

『子どもが現在を最も良く生き、のぞましい未来をつくり出す力の基礎を培う』

子どものありのままの姿を受け入れ、健全な心身の発達をめざして、1人ひとりに丁寧に向き合って保育を行ないます。そうして子どもの最善の利益を尊重し、福祉を増進するにふさわしい生活の場をつくります。

- ・子どもたちがのびのびと自分を表現できる生活を大切にします
- ・具体的な経験を通して感性を育て、達成感を味わえる働きかけをします
- ・子どもの気持ちを受けとめ、基本的な生活習慣や人への信頼関係を育てます
- ・おとなとの愛着関係を育み、豊かな生活世界を拓けます

こんな子どもに育ってほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

- ①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とのかかわりとおした生きる喜びや自己表現が達成」できるように
- ②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように
- ③あそびをとおして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように

すべては環境から

安心して生活し、あそぶ「空間」環境と、優れた遊具や本物・良質な家具や調度品といった「物的」環境、子どもを愛し慈しむ心と自己研鑽を怠らない保育者という「人的」環境、これらが相まって子どもが主体的に学びの物語を紡ぐ、充実した「時間」の環境がつけられていきます

2. 活動状況と自己評価

【基本的事項】(こどもの木かけ共通)

◆こどもが、自らの力で取り組む姿勢が育ち、周囲とのかかわりを高め、育ちあえているか

コロナ禍のため制限の多い環境下でも、子どもたちは保育園で働くたくさんのおとなたちに囲まれ、見守られて、安心して自分らしさを発揮しながら生活してきた。そのためクラスの他の子どもたちや幼稚園の先生方、実習生、見学者、お散歩で出会う地域の方々、配達にくる八百屋さんなどと、自然にその子らしく関わることが出来、親から離れて過ごす時間もののびのびと育っている。やらされている、させられている、言うことを聞かされている、という雰囲気や姿勢は感じられず、自分で選び、取りくむことができている。

◆子どもたちに豊かな感性が育つようならとくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか

園外活動の選択肢を増やして、自然の豊かな中であそぶことが出来た。身体を使うあそびをプロジェクトで通年学び、秋には運動会の代わりに更に意識して運動遊びを充実させた。五感を養うこと、特に身体じゅうで感じることで出来る触覚を使ったあそびは大切にできた。遊具も柔軟に、他のクラスから適宜借りるなどして、子どもの興味関心や発達課程にあったものを自発的に選択出来るようになってきた。

【重点的にとりくむ課題 (今年度の事業計画から)】

◆ 保育の可視化の前進と、二人称記述・エピソード記述の学びを継続し、保育の質向上につなげる

保育の可視化のひとつであるドキュメンテーションの取りくみは、完成したものを職員全体で見て、良いと思ったところや改善のアドバイスなどを指摘し合った。ポートフォリオの取りくみは、今まで「思い出スナップ」というものをクラスごとで作成していたが、今年度はこれをポートフォリオの考え方にそって個別に作成した。作成に手間と時間のかかる手法を改善し、来年度もポートフォリオに取りくみしたい。二人称・エピソード記述はあらためて全体会議で学び、今年度初めて取りくむ職員は、子どもをよく観る目を養うことが良い記録につながることを理解できた。2年目の取りくみとなる職員の記録にも良い変化が広がっている。実際の記録をピックアップして職員間で読み合い、どこが良いところなのか、改善点はどこか、などがつかめた。来年度は業務改善の一環としておたより帳と日誌を連動させることを計画しているため、記録の分量は減るが、学んでいる記録方法の良さを更に活かして、保育の質向上につなげたい。

◆ 保育所保育指針を大前提とし、こどもの木かけの基本理念を踏まえた保育を実践する

個別援助プランの書式を全改訂し、0歳児クラスは指針にある3つの視点(身体的発達・社会的発達・精神的発達)を軸にした1か月のプランとそのふりかえりを1枚の用紙にまとめるようにした。1、2歳児クラスの個人援助プランは3か月毎ではなく毎月立案するようにとの杉並区から指導を受け、指針の5領域を軸にした項目立てから更にシンプルな項目立ての毎月立案の書式にした。また、その計画立案とふりかえりは、その子どもの担当者一人だけで作成するのではなく、クラス職員全員で話し合っているように指導された。書式はシンプルになったが、毎月「全体的な計画」や「年間指導計画」を参照しながら、5領域を意識しつつ、クラス職員全員の意見を取り入れるようになった。業務改善と同時に、1人の眼による見落としのない、子ども1人ひとりを丁寧に見守る理念にかなった方法になった。

◆ 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の徹底

消毒作業の負担軽減と効果の向上のため、次亜塩素酸水生成器を厨房と保育室に導入した。次亜塩素酸ナトリウムを使用する頻度が減ったため子どもにとっても職員にも安全で、遊具や保育環境の消毒方法も簡便になった。また2歳児保育室の換気が不十分で、二酸化炭素濃度が高くなりがちだったため、室内に換気扇をもう一基追加設置した。1歳児室に設置したサーキュレーターは室内の空気を循環させ、窓辺の輻射熱を緩和することが第一の目的だったが、使用すると同時に窓からの外気が入るので換気を兼ねることができ、役立った。0歳児クラスの空気清浄機は老朽化のため、新しいものに買い替えて、手入れも楽で効果も高くなった。

3. 今後の課題・取り組んでいきたいこと（中長期的視野に立って）

今年度は職員にとって負担の大きい記録類の見直しをすすめ、業務改善に取り組んできた。来年度は更に「おたより帳」を複写式にし、毎日の保育日誌の個別記述欄をやめて、複写のおたよりを日誌の個別記録として保存する計画である（区立保育園も同様の方式を実施している）。今後更更に業務軽減のための見直しをすすめ、保育実践に注力できる環境を整え、働きやすい職場づくりに努めたい。

3歳児以降保育無償化の時代にあって、0,1,2歳児のみの乳児保育園である当園は、玉成幼稚園に進みたいからあえてこの保育園を選んだ、という家庭を確実に取り込むことが不可欠である。本格的な人口減少社会の到来を前に、『選ばれる』園であり続けるための方策を、幼稚園とともに考えていかなければならない。そのために、私たち木かげの職員一人ひとりが、自分たちの園の存在価値はどこにあるのかということを通理理解し、何を大切に守り、何を変えていく必要があるのかを見極めて、一致協力して取り組む必要がある。今年度は開設以来初めて、保護者向けアンケートを実施した。自分たちの目線だけではなく、保護者のリアルタイムのニーズを捉え、それに対し誠実に応えていくことも非常に重要なことである。アンケートの保護者回答は幼稚園と共に分析をおこない、木かげとして具体的な改革の検討に入っている。アンケートは毎年実施し、これからも保護者の声を積極的に取り込んでいきたいと考える。

◀ こどもの木かげ運営委員会による評価 ▶

1 評価項目の達成及びとりくみ状況について

今年度より新しい自己評価チェックシートとなり、チェック項目が変更されたため単純に経年比較は出来ないが、子どもの最善の利益を守る部分の自己評価が高いことは安心できる。社会の情勢がどうであろうとここを守っていくことは保育の根幹となる。一方で、コロナ対応による消毒作業等、環境を整える時間に追われ、子どもにゆったりと向き合うという本来の保育が難しかった場面も見受けられたようである。現場ではこの点を踏まえ、業務改善を行なうことでこの状況下でも良質な保育が出来ないかと日々模索してきた様子がうかがえる。また、今年度特筆すべき取り組みとして、保護者向けアンケートの実施があげられよう。アンケートを通じて保護者の日々の思いや意見を受け止め、それに対する園の回答という形を通して双方向の意見交換が出来たということは評価に値する。

2 今後とりくむ課題

保育の質をさらに高めるといふ観点から、コロナ禍で難しくなっていた研修の活用にも積極的に取り組んで頂きたい。研修もオンライン開催など受講しやすい環境となっていることを好機と捉え、色々な立場の職員の知識およびスキルアップを図り、それを子どもたちへの保育に還元して欲しい。また、運営委員会から外部への情報発信の点でもう一工夫しても良いのではないかと意見も出たように、この園の大切にしていることや日々の取り組み、保育園卒園後の幼稚園での長時間保育への連続性などをホームページ等で上手くアピールおよび発信することにも是非取り組んでいって頂きたい。

3 総合所見

こどもの木かげとして独自に学校評価に取り組み始めてから今回で5年目となる。毎年の自己評価と改善を踏まえ、より良い方向への進化を図っているものの、ここ2年は未知のコロナ禍への対応にかなりの労力を割かざるを得なかった現状がある。それでも日々の保育を止めてはならないという職員の方々の思いやご努力に敬意を示したい。一方で、しばらくはコロナ禍での保育を前提とし、その上でさらに前向きな取り組みに転換していく局面に入っていくべきと感じる。すでに取り組んでいるコミュニケーションなどの保育の見える化、さらなる業務改善などに加え、中長期的にはこどもの木かげの理念を基本とした上で、保育園と幼稚園さらには保護者との連携を持ちながら変化していく社会情勢の中において子どもたちが最善の利益を得られる環境を提供できる方向性を追求していかれることを期待する。